

郷土博物館・文学館だより



抒情抒

『抒情詩』 明治 30 年 民友社
3 人の作品が収録された詩集

区制施行 80 周年記念企画展

独歩・花袋・国男 - 丘の上の青春 -

文学史上、多大な功績を残した国木田独歩・田山花袋・柳田国男の三人は、青春時代、「渋谷」の地で精力的に文学活動を行っていました。明治 30 年(1897)に刊行された詩集『抒情詩』は、独歩・花袋・国男らによる共著で、こうした交流の一つのあかしともいえます。

独歩の死後、花袋は自然主義文学の代表作家となり「ありのままにえがく」ことを主張します。これに対し国男は「肝心なところは想像で書いている」と反発、明治 43 年に岩手県の山村で伝承されてきた「カップ」や「ザシキワラシ」などの話を「事実」として淡々と記した『遠野物語』を刊行します。

このように、文学観では相容れなかった二人でしたが、その交流は花袋が亡くなるまで



2 月 16 日に行われた展示解説風景

続きます。

平成 24 年は渋谷区制施行 80 周年であるとともに、柳田国男没後 50 年という記念の年でした。本展はこれを機に開催しました。これまであまり知られてこなかった三人の交流を知っていただければと思います。

復元された竪穴住居 — 代々木八幡遺跡 —

新宿駅から小田急線の電車に乗り、3つ目の駅で下車、駅から山手通りに出て初台方面へ5分程歩くと、右手にこんもりとした社が見えてきます。代々木八幡宮です。階段を登り参道を進んでいくと、社殿に向かって左側にとがった屋根のようなものが見ます。それが、復元された代々木八幡遺跡の竪穴住居です。

代々木八幡遺跡は、まず昭和25年(1950)の夏、國學院大學考古学資料室と地元の上原中学校の生徒たちによって、発掘調査が行われました。これが、渋谷での本格的な発掘調査のはじまりです。さらに同年秋には、旧渋谷区史編纂委員会が発掘調査を行いました。

この2回の調査では、縄文時代の早期から後期にかけての遺物が出土しました。なかでも中期の遺物、加曽利E式と呼ばれている土器(約4,500年前頃)がたくさん出土しました。また、縄文人が生活した家の跡(住居跡)も確認され、翌年には、発掘で確認された跡を手がかりに、縄文人の住居が当時國學院大學の教授をされていた樋口清之氏(のち國學院大學名誉教授)によって想定復元されました。

人類がまだ大型獣を追いかけて移動していた時代から、ある場所に定住するようになったきっかけの一つに、本格的な家を建てて住むようになったことがあげられます。それまでの移動を中心とした生活でも、実はテントのようなものを建てていた例が確認されています。しかし、しっかりしたものではありませんでした。家の形に円形や隅丸方形の竪穴を掘ったあと、柱穴を掘り、そこに柱を立てて上屋を築造した、い

わゆる竪穴住居が一般化してくるのは、日本の場合、縄文時代の早期とされています。

現在、日本の遺跡公園などで竪穴住居が復元されていますが、上屋の形はさまざまです。それは遺跡からは屋根や壁、柱などがそのままの状態出土しないからです。家が焼失するなど、何らかの好条件がそろうことで当時の部材などが残り、建物のようすがわかることがあります。そのため竪穴住居というと茅葺屋根のイメージがありますが、そのほかに草や樹皮や板葺があったり、あるいは土を上にかぶせたものも存在したことが発掘でわかってきました。

昭和26年当時、代々木八幡遺跡の住居を復元するにあたって問題がありました。それは、縄文以降の弥生や古墳時代には銅鐸に建物の絵が描かれてあったり、家形埴輪があったりなど、復元するための参考資料があるのですが、縄文時代は全くといってなかったからです。そのため、建物に関する世界の民族例や日本建築史などを参考にして、想定復元図が描かれ、復元住居が完成しました。



復元された代々木八幡遺跡の竪穴住居



柳田国男の『遠野物語』

民俗学者・柳田国男〔明治8—昭和37〕が自ら文学作品と認めている『遠野物語』は、明治43年(1910)に刊行されました。本書は、佐々木喜善から聞いた遠野地方の伝承を記録したもので、農山村の人びとと異界のものたちとの交流などが描かれています。

『遠野物語』については、さまざまな作家が感想を述べています。まず、親交の深かった田山花袋は「粗野を気取った贅沢。さう言つた風が到る処にある。私は其の物語に就いては、更に心を動かさないが、其物語の背景を塗るのに、飽まで実際の観察を以てした処を面白いとも意味深いとも思つた。(「インキ壺」)」と述べており、自然主義文学者の立場からリアリズムを重視し、柳田の観察態度を認めています。

島崎藤村もまた「『遠野物語』の著者を民族心理の研究者の霊異の採集者としてよりも、観察の豊富な旅人として見たいと思ふのはこの故である。(「遠野物語」)」として、柳田を「観察豊富な旅人」と評しています。

一方で、作品世界そのものに強く惹き付けられたのは泉鏡花でした。「近ごろ近ごろおもしろき書を読みたり。柳田国男氏の著遠野物語なり。再読三読尚ほ飽くことを知らず……附馬牛の山男、閉伊川の淵の河童、恐ろしき大息を吐き、怪しき水掻の音を立て、紙上を抜け出て目前に顕る処、近来の快心事類少なき奇観なり。(「遠野の奇聞」)」という言葉には、本書から大きな刺激を受けたことがうかがえます。

歌人であり民俗学者でもあった折口信夫にとっても『遠野物語』は特別なもので、「遠野物語」と題する詩の中で「我が為の道別のふみ」と詠っています。ここには、折口が柳田を生涯にわたって師とあがめた心もちが感じられます。

昭和の時代になっても、三島由紀夫が評論「小説とは何か」の中で『遠野物語』を絶賛しています。

私は最近、さういふ自分のたのしみだけの読書として、柳田国男氏の名著「遠野物語」を再読した。……全文自由な文語体で書かれ、わけても序文は名文中の名文である。……私が「小説」と呼ぶのはこのやうなものである。小説がもともと「まことらしさ」の要請に発したジャンルである以上、そこにはこのやうな現実を震撼させることによつて幽霊(すなはち言葉)を現実化するところの根源的な力が備はつてみなければならぬ。

さらに、平成の世となつてからも、水木しげるによつて『遠野物語』全119話が漫画化されています。こうした歴史を踏まえつつ、『遠野物語』の一話一話を読んでみてはいかがでしょうか。



『遠野物語』明治43年(復刻版)

収蔵資料紹介

「手洗器」



水道普及以前は、川や井戸などの水を汲みに行き、水を溜めて生活に使っていました。

便所を使用した後に、手を洗う際も、近くの庭先などに手水鉢（ちようす）と呼ばれる容器を置き、そこに水を入れて、一回ごとに柄杓（ひしゃく）で水を汲み出し手を洗いました。

この手水鉢は外にあるため、雨やホコリ、虫などが入り、清潔とはいえず、しかも毎日水を取り換える必要がありました。

そうした問題を解決するものとして、明治に入ると、蓋を付けた桶状の容器に蛇口を付けた「手洗器」が作られました。しかし、汚れた手で蛇口を触るため、衛生的でないといわれ、さらに、蛇口を硬く閉めないで水が徐々に流れ出て無くなり、使う際にわざわざ水を汲みに行かねばならず、かえって不便なこともありました。そこで、明

治末頃に考案されたのが今回の資料です。発売当初は、「衛生手洗器」「自動手洗器」などと呼ばれていましたが、普及すると、「手洗器（てあらいき）」の名称に定着しました。

使い方は、まず便所近くの縁側などから、手を伸ばして届く程度の場所に「手洗器」をつり下げ設置します。これは流れ出た水が、庭に落ちるようにするためです。そして、手洗器の下部にある棒状の突起を手で上に押し上げます。すると水の流れるのを抑えていた弁が数秒間だけ開き、複数の穴からシャワー状に水が流れ出し、手を洗い終わる頃に水が自動的に止まるというものです。

「手洗器」は、水道が普及してから、衛生的だとして、流しの上に設置され、使用する家が多く、戦前にはよく見かけるものでした。

【開催中の展示】

企画展「独歩・花袋・国男 丘の上の青春」

平成25年3月24日（日）まで

国木田独歩・田山花袋・柳田国男の交流を紹介。

◆展示解説

平成25年3月16日

午後2時から学芸員による展示解説を行います。

【今後の展示予定】

「渋谷現代短歌優秀作品展」

平成25年4月2日（日）～4月14日（日）

*第13回渋谷現代短歌の優秀作品を展示します。

白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

※震災に伴う節電を継続し、開館時間を13:00から変更しています。詳細については、お問合せください。

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 観覧料100円（80円） 小中学生50円（40円）

※1. 市内100円以上の団体料金
2. 60歳以上の方、障害のある方と付き添いの方は無料

お問合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目1-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.22
平成25年3月1日発行